

[成果情報名]高冷地のハウス型大型トンネルによるピーマン及びパプリカの新規栽培法

[要約]ハウス型大型トンネルを利用したピーマン及びパプリカ栽培は、露地栽培と比べ約1～1.5ヶ月程度収穫期拡大するとともに、ピーマンは2条放任、パプリカは2条4本仕立て栽培を行い、全量基肥マルチ下畝内施肥を行うことで安定生産及び省力化が図られる。

[担当]山梨県総合農業技術センター・高冷地野菜・花き振興セ・岳麓試験地・志村貴大

[分類] 技術・普及

[背景・ねらい]

ピーマン及びパプリカは新規品目として有望であるが、無霜期間が短い富士北麓地域において安定生産するためには、ハウス設置が必須である。一方、新規栽培希望者にとって、高額な設備投資が負担となっている。そこで、開発した低コストかつ耐候性のハウス型大型トンネルに適したピーマン及びパプリカの安定生産技術の確立を図る。

[成果の内容・特徴]

ピーマン

1. 春期及び秋期の低温時に全面被覆することにより、慣行栽培に比べ、定植時期を約1ヶ月前進化することができ、収穫期間を約1.5ヶ月拡大することが可能となる（図1）。
2. 2条放任栽培（株間50cm、条間50cm）が適している（図2、表1）。
3. 露地栽培（対照）と比べ、単位面積あたり収量の増加が可能となる。（図3）。
4. 緩効性肥料による全量基肥マルチ下畝内施肥（N40kg/10a）により、施肥の省力化が可能となる（図6）。

パプリカ

5. 春期及び秋期の低温時に全面被覆することにより、慣行栽培に比べ、定植時期を約1ヶ月前進化することができ、収穫期間を約1ヶ月拡大することができる（図1）。
6. 2条4本仕立て栽培（株間40cm、条間50cm）が適している（図2、表1）。
7. 露地栽培（対照）と比べ、単位面積あたり収量の増加が可能となる（図3）。
8. 緩効性肥料による全量基肥マルチ下畝内施肥（N40kg/10a）により、施肥の省力化が可能となる（図4）。

[成果の活用上の留意点]

1. 試験は高冷地野菜・花き振興センター岳麓試験地（標高820m）で行った。
2. パプリカの日焼け防止対策として、被覆資材に幅3mの梨地ビニールを用いる。
3. ピーマン・パプリカともにトンネル内にマス目幅30cmのフラワーネットを用いる。
4. 換気を随時行い、適期防除を実施する。

[期待される効果]

1. 低コスト安定生産栽培が可能となり、品目拡大が図られる。
2. ビニールで施設全体の被覆が容易にできるため、気象災害の被害が軽減される。

